

甲州記法でデータの計算法を学ぶ意義

日本では、小学校で数の計算方法を習うことで、数がどのようなもので、どのように操作できるかを、ほとんどの人が体得しています。これによって、実に広い領域を **数量化** して扱う能力が得られます。それと同じように、データの計算方法を学ぶことで、データがどのようなものであり、どのように操作できるかを習得し、その結果として、多くの領域を **データ化** して捉える能力が向上します。



それでは、甲州記法は、どのような点で、データの計算法を学ぶ媒体として、すぐれているのでしょうか。

1. 関係モデルの理論への準拠

甲州記法は、データベースの方式として、もっとも実績のある関係データベース (RDB) と同じ考え方を採用しています。RDB の標準言語である SQL は、理論上の問題点を抱えていることが知られていますが、甲州記法は、この問題点を解消しており、関係モデルの理論に準拠した形でデータの扱い方を学べます。理論へ準拠した知識は、古くなりにくく、一生を通して役立ちます。

2. データベースからの分離、親和性、発展性

データベースからの分離とは、RDB の DB を除いた R の部分、つまり、関係モデルの部分だけを学べるということです。RDB を学ぶことと、R だけを学ぶことを比較すると、R だけの方が、より少ない時間で学べます。そこで得られた知識を使えば、RDB がより学びやすくなるだけでなく、R + XXX という発展的な組み合わせも理解できるようになります。

3. 表現と計算を統合した表記体系

甲州記法では、データの書き方と計算式の書き方、つまり、データの表現と計算の双方が、ひとつのまとまりのある表記体系になるように設計されています。これは、たとえば、 $5 + 7 = 12$ という式において、数の書き方と計算式の書き方が、ひとつの表記体系のなかに収まっていることに対応するものです。これによって、データがどのようなものであり、それをどのように操作できるかを、より体系的に理解できるようになります。